

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：34412

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00895

研究課題名(和文)メタ言語能力を涵養する言語産出型TILT教授法の開発

研究課題名(英文)Development of a language production-oriented TILT teaching method to cultivate metalinguistic abilities

研究代表者

南津 佳広 (Minamitsu, Yoshihiro)

大阪電気通信大学・共通教育機構・准教授

研究者番号：70616292

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、言語産出局面における語用論的・修辭的調整に焦点をあて、TILT(言語教育における通訳翻訳訓練技法)を導入することで、語用論的・修辭的調整も加えて訳出言語で表現することを可能にするための教授法を検討した。そのためには、文法訳と語用論的翻訳という2段階の翻訳を導入する必要があり、学習者は徐々に文脈を考慮した異文化媒介翻訳を意識するようになった。さらに、「飽和化」・「アドホック概念構築」などの語用論的操作を安定的に行えることも明らかとなった。また、字幕編集することによって、コミュニケーション機能や意識し、「省略」・「言い換え」・「格関係の変化」の3つの方略を安定的に使用することも分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、TILTが関与する「メタ言語能力」に焦点をあて、学習者の言語産出を促進することで、TILTがもたらす「メタ言語能力」への具体的な効果を検証することが目的である。TILTを導入することで、語用論的・修辭的調整も加えて妥当な訳出言語で表現することを可能にするための教授法を検討した。その結果、語用論的に妥当な訳出を行わせるには、意味論的な言語産出プランをもとに語用論的な調整を加える訳出プロセスの必要性であり、メタ言語使用を可視化させることがより安定的な言語産出を促すことを実証することができた。

研究成果の概要(英文)：This study focused on incorporating pragmatic and rhetorical adjustments into language production, using the TILT technique in language education. A two-step translation process involving grammatical and pragmatic translation was introduced, guiding learners to consider the context in cross-cultural mediated translation. Learners demonstrated stable performance in pragmatic operations like "saturation" and "ad hoc concept construction." Subtitle editing enhanced communication skills and awareness, enabling the stable use of three strategies: "omission," "paraphrase," and "changes in grammatical relations." Overall, this research provides valuable insights for teaching methods that facilitate natural and contextually appropriate expressions in the target language.

研究分野：通訳翻訳学

キーワード：メタ言語能力 TILT 逐次通訳 字幕翻訳

1. 研究開始当初の背景

人間の言語運用能力を向上させるためには、さまざまなアプローチが存在する。中でも言語教育においては、通訳翻訳 (Translation and Interpreting in Language Teaching, TILT) が近年注目を集めてきた。TILT の基本的な考え方は、通訳翻訳の訓練を通じて学習者の「言語運用能力」、「異文化コミュニケーション能力」、及び「メタ言語能力」の3つの能力を強化することである。TILT はどのように位置づけられているのか。

欧米では、通訳翻訳が言語能力の養成に大きく貢献する可能性が再評価され始めている (Cook 2010、Campbell 1998)。一方、国内では、従来の英語教育に対する不満を補完するものとして、2000年以降 TILT が注目されてきました。しかしながら、国内の外国語教育では TILT の理論的基盤が整備されていないまま導入されている。例えば、「シャドーイング」や「サイト・トランスレーション」がメタ言語能力の向上に寄与すると主張されてきたが、具体的な効果は検証されていない。

さらに、TILT は学習者の言語理解を促進するために導入されているが、言語運用能力を涵養 (かんよう) するには理解だけでなく産出局面の研究も重要である。ところが、産出局面に焦点をあてた研究はほとんど行われてこなかった。

2. 研究目的

本研究では TILT が関与する「メタ言語能力」に焦点をあてることにし、学習者の言語産出を促進することで、TILT がもたらす「メタ言語能力」への具体的な効果を検証することが目的である。このような観点から、言語産出型 TILT の教授法を整備・開発することを目指す。

以下、TILT を「外国語教育における通訳翻訳訓練手法の応用」に限定する。現在、外国語教育にて通訳訓練技法を応用した取り組みは相当数に上る。しかしながら、これらの授業実践における問題点は、(1)TILT の理論的基盤が整理されていないこと、及び(2)学習者の言語産出局面を促進する方法についてはほぼ触れられていないことの2点に集約することができる。学習者の「メタ言語能力」を伸ばすには、言語の理解局面のみならず、産出局面にも焦点をあてなくてはならない。本研究の独自性は、「メタ言語能力」の伸長に焦点をあてた言語産出型 TILT の教授法を整備・開発することにある。本研究では、メタ言語能力を「言語を客対視して自覚的な運用を可能にする能力」と位置づける。

では、なぜ TILT を導入するのか。TILT は、学習者の「メタ言語能力」の伸長を促す格好の方法だからである。通訳翻訳における言語産出のプロセスを精査すると、表層的な処理だけでは先行文脈あるいは既有知識と十分な整合性や関連性、あるいは情報価値を持った意味表象が形成できない場合が数多くある。その場合、通訳翻訳者は先行文脈や長期記憶との照合による語用論的推論を元に意味の操作を行う「深い処理」を行う。この「深い処理」こそ、「メタ言語能力」が不可欠となる。「深い処理」を伴う産出局面では、通訳翻訳者は原発言者や筆者の発話意図に最も適切に対応する訳出言語の語彙又は表現形式を求め、これに必要な文法規則を適応して基本構造を生成し、語用論的・修辭的調整を加えた上で、最終的な訳を生成することが指摘されている。

本研究では、言語産出局面における語用論的・修辭的調整に焦点をあてる。そして通訳訓練技法の「ノート・テーキング」と、字幕翻訳訓練手法を導入することで、言語化され

ていない「言語産出プランの骨組み」から文法規則を適応した言語の基本構造を生成するだけでなく、語用論的・修辭的調整も加えて訳出言語で表現することを可能にするための教授法を整備・開発する。

3. 研究の方法

2018年度は、先行研究を踏まえて、英語の授業において通訳式メモを導入することで、学習者の言語産出を録音し、学習者自身にその録音を聞いて内省させるデータ収集を行なった。

2019年度は2018年度に引き続き、英語の授業において通訳式メモを導入することで、学習者の言語産出を録音し、学習者自身にその録音を聞いて内省させるデータ収集を行なった。さらに、翻訳プロセスにおけるメタ言語能力の伸長に焦点を当てて、絵本翻訳を導入したデータ収集と分析を行った。これは、2018年度のデータ分析から着想を得たものであり、翻訳プロセスにおいて、どの意味単位で処理するのか、原文の意味論的制約はどこまで影響を及ぼすのかなどを検証するために行った。まず翻訳の予備演習を行ってから絵本のテキストのみを打ち出した演習シートを使用して1回目の翻訳(英日)を行わせた。この1回目の翻訳では、調査対象とした2クラスのうち、一方をSTから直接TTを作成するグループ(D1)とし、もう一方を、STを手掛かりに解釈したイメージを絵に描かせてからTTを作成するグループ(D2)とした。計7回の授業セッションを経て全体をひと通り翻訳し終えた後、ピア・レビューを行わせた。その後、両グループともに、原著の絵を転用した絵付きワークシートを使って同じテキストを再翻訳させ、D1とD2で翻訳における推論操作に差が生じているかどうかを比較分析した。

ところが、2020年度から、新型コロナの影響によって、研究方法の大幅な見直しを迫られた。特に、「ノート・テーク」による発話産出のデータ収集については、遠隔授業への切替えにより、紙媒体での「ノート・テーク」のデータ収集が困難となった。2020年度と2021年度は、遠隔授業でも引き続き行うことができた字幕翻訳に焦点を絞り、字幕翻訳における語用論的操作、特にパラフレーズとメタ言語能力の涵養に着目し、データ収集を行なった。

2022年度は2021年度を発展させ、字幕翻訳でのパラフレーズに着目した。以下の2つのリサーチクエストション(RQ)を立てた：(a)文脈を意識した翻訳ができるのか、(b)制約のある字幕翻訳において、メッセージの復元を実現するために、学習者はどのような戦略を用いることができるのか。RQに基づく考察を進めるにあたり、授業での英日と日英の字幕翻訳のコースワークは以下の通りとした。文法的な翻訳に慣れている学習者に異文化を介在した翻訳(語用論的な翻訳)に向かわせるために、3つの翻訳プロセスを段階的に導入するフォーマットを導入した。まず、学生にとって身近な文法訳を行った。次に、文脈や百科事典の知識、STの意図するところを考慮した語用論的な翻訳を行った。最後に、非常に厳しい字数制限の中で編集する字幕翻訳を導入した。各翻訳の終わりに、受講生が翻訳ファイルを講師に提出させた。講師は、提出された翻訳ファイルの中からランダムにひとつを選び、匿名で公開添削を行った。その添削を受けて、学習者は講師の評価項目と添削例に基づいて自分の翻訳を再翻訳した。最後に、学習者に「何に気づき、どのように訳し直したか」を記述させることで、メタ言語使用を可視化させて言語使用に対して意識付けさせるようにして、その結果を分析した。2022年度は2021年度に引き続き、字幕翻訳でのパラフレーズに着目した。以下の2つのリサーチクエストション(RQ)を立てた：(a)文脈を意識した翻訳ができるのか、(b)制約のある字幕翻訳において、メッセージの復元を実現するために、学生はどのような戦略を用いることができるのか。RQに基づく考察を進めるにあたり、授業での英日と日英の字幕翻訳のコースワークは以下の通りとした。文法的な翻訳に慣れた学生に異文化を介在した翻訳(語用論的な翻訳)に向かわせるために、3つの翻訳プロセスを段階的に導入するフォーマットを導入

した。まず、学生にとって身近な文法訳を行った。次に、文脈や百科事典の知識、STの意図するところを考慮した語用論的な翻訳を行った。最後に、非常に厳しい字数制限の中で編集する字幕翻訳を導入した。各翻訳の終わりに、受講生が翻訳ファイルを講師に提出しました。講師は、提出された翻訳ファイルの中からランダムにひとつを選び、匿名で公開添削を行った。その添削を受けて、学生は講師の評価項目と添削例に基づいて自分の翻訳を再翻訳した。最後に、学生に「何に気づき、どのように訳し直したか」を記述させることで、メタ言語使用を可視化させて言語使用に対して意識付けさせるようにした。

4. 研究成果

2018年度の結果として、(1)発話プランを可視化させることができたことと、(2)メモを手掛かりに制限時間内に文法的で論理的なフルメッセージを英語構成させようとしていることにもつながった。さらに、学習者は文法的な正確さよりも語用論的な確さを優先させて発話しようとしていることも明らかとなった。さらに、訳式メモを英語の発信力強化にどのように応用することができるのかについても調査・分析を進めた。その結果を踏まえて、日本メディア英語学会第126回西日本地区研究例会において、シンポジウム「教育と通訳 どのメディアをいかに教育に応用するか」を開いた。日本におけるTILTの広がりを概観し、「逐次通訳訓練手法はモノログ・スピーチ産出の訓練にどこまで貢献しうるか」のテーマで研究発表を行った。さらに、Korean TESOLの第26回国際会議にて"Promoting Fluent Language Production through the Method of Consecutive Interpreting"の中でテーマでも発表した。あわせて、翻訳のプロセスも検証するために、英語の授業にて翻訳を導入するための予備演習の教材を作成して導入した上で、英語の絵本を選定して学習者に日本語へ翻訳を行ってもらった。翻訳のプロセスでは、学習者は「飽和化」、「アドホック概念構築」などはオンラインで処理できているが、「自由拡張」などはばらつきが生じた。1回目の翻訳を踏まえて校正作業を行い再翻訳させたところ、「自由拡張」のばらつきは修正されることはなかった。その結果を第47回九州英語教育学会において「TILTによる訳出をめぐる語用論のプロセス分析と論理的思考力の涵養」のテーマで発表した。

2019年度は、通訳式メモに基づいた言語産出と内省による分析データ成果の一部を、日本通訳翻訳学会第20回年次大会にて「逐次通訳における意味機能による制御と推論操作」と題して発表した。翻訳におけるプロセス分析とメタ言語使用の分析については、その結果、D2の学生のほうが自由拡充や含意の導出など、幅広い推論操作を行ってTTを作成していたことが明らかとなった。その結果の一部を、第9回日本メディア英語学会年次大会にて「思考の礎のひとつとしての推論力の構築 - 翻訳を通じたメディアとしての文学テキスト活用の可能性を探る - 」と題して発表した。さらに、その発表内容を発展させ、日本メディア英語学会の学会誌にて「思考の礎のひとつとしての推論力の構築 - 絵本翻訳を通して - 」とのタイトルの研究論文を発表した。

2020年度の字幕翻訳の分析では、まず、SLのセリフをいわゆる翻訳させた上で文字数の制約にのっとって字幕を作成させるプロセスを通してピア・レビューと省察を繰り返させたところ、「文単位でのパラフレーズ」に最も苦戦していることが分かった。視聴者が違和感のないものとして容認できる訳出を行うためには、SLとTLの文法的(意味論的)制約に加えて、推論を経た語用論的な操作を行わなくてはならない。その中で核となるのが「文単位でのパラフレーズ」である。この「文単位のパラフレーズ」は、単に冗長性をなくした表現にパラフレーズするのみならず、日本語と英語をはじめとする外国語では言語化する際の「視点」の置き方が異なるために、翻訳行為を行う際には、言語化された文構造の根幹をなす「行為主」・「動作」・「その対象」から構成される命題関係を、「動作」をあらわす表現を中心に置き換えなくて

はならいことまで含まれる。この文単位のパラフレーズを学生が苦手とする主な要因として考えられるのは、発話内行為の解釈の失敗と視点の変更による動詞を言い換えることができなかつたことである。そこで、学生が苦手とする「文単位でのパラフレーズ」に着目して、データを収集し、分析と類型化を行った。その中でも、特に学生が苦手としていた事象を把握した上で視点の変更を伴う語用論的な言い換えを促す方法を分析し、日本メディア英語学会の第11回年次大会にて「字幕翻訳によるテキストの解釈とメタ言語能力の涵養について」と題して発表した。

2022年度について、RQ(a)に対する結果としては、文法訳と語用論的翻訳という2つのレベルの翻訳を導入したところ、学生は徐々に文脈を考慮した異文化媒介翻訳を意識するようになったことが分かった。(b)については、字数制限のある字幕を編集することで、コミュニケーション機能や言葉の使い方を磨き、「省略」・「言い換え」・「格関係の変化」の3つのストラテジーを用いていることが分かった。この結果を、台湾で行われた2022 ETA International Conference on English Language Teaching と、研究論集(人間科学研究)25号“Enhancing Metalinguistic Awareness through Subtitle Translation”にまとめた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 南津佳広・中内啓太・杉村寛子	4. 巻 10（通算59）
2. 論文標題 思考の礎のひとつとしての推論力の構築－絵本翻訳を通して－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Media, English and Communication: A Journal of the Japan Association for Media English Studies	6. 最初と最後の頁 47-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南津佳広・杉村寛子・工藤多恵・金井啓子	4. 巻 9
2. 論文標題 教育と翻訳通訳～どのメディアをいかに教育に活用するか～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Media, English and Communication: A Journal of the Japan Association for Media English Studies	6. 最初と最後の頁 57-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Minamitsu Yoshihiro	4. 巻 25
2. 論文標題 Enhancing Metalinguistic Awareness through Subtitle Translation	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人間科学研究論集	6. 最初と最後の頁 25-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 南津佳広・杉村寛子
2. 発表標題 字幕翻訳によるテキストの解釈とメタ言語能力の涵養について
3. 学会等名 日本メディア英語学会 第11回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 南津佳広
2. 発表標題 逐次通訳における意味機能による制御と推論操作
3. 学会等名 日本通訳翻訳学会第20回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 南津佳広・中内啓太・杉村寛子
2. 発表標題 思考の礎のひとつとしての推論力の構築 - 翻訳を通じたメディアとしての文学テキスト活用の可能性を探る -
3. 学会等名 第9回日本メディア英語学会年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 南津佳広
2. 発表標題 サイトトランスレーションにおける語用論的处理に関する一考察
3. 学会等名 第48回九州英語教育学会宮崎研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 南津佳広
2. 発表標題 「教育と翻通訳～どのメディアをいかに教育に応用するか～」
3. 学会等名 日本メディア英語学会第126回西日本地区研究例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshihiro Minamitsu
2. 発表標題 "Promoting Fluent Language Production through the Method of Consecutive Interpreting"
3. 学会等名 The 26th Korea TESOL International Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 南津佳広・杉村寛子
2. 発表標題 「TILTによる訳出をめぐる語用論的プロセス分析と論理的思考力の涵養」
3. 学会等名 第47回九州英語教育学会鹿児島研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Minamitsu, Yoshihiro
2. 発表標題 Enhancing Metalinguistic Awareness through Subtitle Translation
3. 学会等名 2022 ETA International Conference on English Language Teaching (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 杉村寛子・南津佳広、工藤多恵
2. 発表標題 「物語の翻訳に見る思考の過程 いかにして「論理的想像力」を引き出すか、あるいは引き出せるか」
3. 学会等名 JACET関西支部文学教育研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------